日本の酪農のあり方

東京都立瑞穂農芸高等学校 畜産科学科　3年　大竹 由起子

「今までありがとう。さよなら、またね」

私たちはそういって、早朝１頭の牛を見送りました。名前はアンジュ。２日前に分娩したばかりの牛です。大きなトラックに乗せられていく彼女は自力で立ち上がり、重たい乳房をゆらしながらゆっくり歩いていきました。いつもは良い子のアンジュは、この時反抗するかのごとく足を踏んばり人が引っ張っても動こうとしませんでした。後ろから追い立ててやっと歩いたかしこい彼女はきっとこれから自分がどうなるのかわかっていたのでしょう、彼女の目には涙が溜まっていました。

彼女の淘汰理由は乳房炎でも産後疾病でも起立不全でもありませんでした。気性が荒く生徒が危険という理由で殺されたのです。なかなか受胎せず体格が大きくなってしまったアンジュは、仔牛時代に受けた事が原因で怖がりな子になってしまったそうです。元来大人しく人思いのやさしい子ですが、その体の大きさゆえ、皆に怖がられていきその結果今回の淘汰となってしまったのでした。もしアンジュがよく乳を出す良い牛だったなら、もし彼女の気性がおだやかなものだったなら、もし仔牛時代に正しい扱いをうけていたのなら…。「たら、れば…。」の結果でしかないですが、人が正しい扱いさえしていたならアンジュは、彼女は殺されずに済んだのかもしれないのです。

私は今、彼女の淘汰をうけて改めて酪農の現状について考えてみました。そして現代牛の命をただのミルクメーカーと思っている酪農が増えていることを知ったのです。

現在日本では酪農経営の規模が大きくなってメガファーム化しています。しかしそれと反比例するかのごとく、牛の供用年数は短くなっています。平均産次数で供用年数を見てみると、１９８３年には3.49産。１頭あたり６産くらいさせてから廃用にしていますが、１９９８年には平均2.81産と短くなっていることがわかります。このデータより牛を3.4産させただけで牛をとりかえていることがわかります。

さらに最近では自分の所で種付、分娩、育成をやらず外部から初妊牛を導入、産んで搾って出なくなったら淘汰、なんてこともされており、まるで牛を生き物ではなくただの「モノ」と思っているような酪農がふえてきています。果たしてこのままでいいのでしょうか。このままの酪農で本当にいいのでしょうか。牛からのしっぺ返しをこのままでは喰らうことになると私は思います。またこのままの状態を続けていて、消費者に安全で美味しい生産物を届けられるのか。日本の酪農は地に落ちていないか、と私は考えます。

国土が小さく狭い我が国日本はどうやっても経営規模はアメリカやオーストラリアのような諸外国には勝てないと思います。いくら広くしたって何千、何万haの土地がいく

つもある外国に敵うはずはありません。しかし日本にも勝てるものがあります。それは生産物の品質と安全性です。きびしい基準に合格したもののみが流通できる日本では、薬が入った牛乳やホルモン剤、人が飲むには適さない牛乳が出回ることはありません。生産現場でもしそういったものが混入してしまった場合も全て廃棄するという安全管理を徹底しています。日本の牛乳は世界一安全なのです。

しかし、牛を犠牲にしながら利益のみ追求するようになってしまった今、そして未来果たしてそれは保たれるのか。そう簡単に悪い方へ変わるはずがないし、むしろ変わってもらっては困るのですが、この現状をこのままにしておいては近い将来悪化しないとも限りません。「日本のおいしい牛乳」を守っていく為には「今」動かないといけないのです。

日本の酪農が今、「こう」なってしまった背景には肉の需要増加や牛乳の消費量低下による生産調整など様々な問題があります。その解決には酪農家や私たち未来の酪農を担う若者の協力、実行が最も大事です。しかし消費者や中間となる農協、乳業会社を始め、農林水産省といった酪農に関わる全ての人の協力が必要なのではと私は思っています。一、二、三次と産業が分かれていってしまっているこの世の中では興味・関心が薄れ「知ろう」という気持ちが人々の中から消え失せてしまいました。“知らない”が誤解を生んで、たくさんのデマや噂がまた消費欲を減らし牛乳自体の消費量をへらしていってしまう原因になるのです。

私はまず、「日本全体での六次産業化」を国主体で進めていくべきだと思います。一部の地域や個々で進められているのですが全国への影響は大きくなく、そこどまりになってしまっています。酪農を始めとした農業や漁業などの一次産業は人々の食を、暮らしを支える大事なものです。なので国はもっと一次産業に力を入れるべきだと思うのです。

それから国にたよってばかりではなく、私たち若者が、酪農家が進んで変えていかなくてはなりません。私たちは今一度酪農の原点に戻る必要があります。それは「命への感謝」なのではないでしょうか。現代日本は「命」を軽視しすぎではないでしょうか。「命」をモノ扱いしていないでしょうか。壊れたからって簡単に捨てて買い換えようとしていないでしょうか。牛はペットではなく経済動物です。ですから時には非情な判断を下すことも経営の為には必要です。ですが経済動物もまた一つの「命」なのです。私たちは「命」に食べさせてもらい、そして今まで生かしてもらっているのです。

良い方向へと変えていくのには人々の意識、行動が大切です。そしてその先導に立つべきなのは高齢者の方ではなく我々若い世代が、その中でも農業を、その中でさらに酪農を学んでいる最中の私たちなのです。1人1人の力はとても小さいけれど、たくさん集まればその力は大きくなります。やがてそれは日本の酪農をよいものへとするでしょう。

私の周りには大きな夢を抱き進もうとしている友人、仲間、先輩・後輩がいます。そして

私自身も今、自らの夢に向け前進し始めようとしている所です。アンジュを始めとした今まで見送ってきた牛たち、頂いてきた命に感謝して。そしてこれから人の都合で命をうばわれる動物がへることを目標にして、日本の未来を、酪農を担っていきたいと思います。